
糞ゲー人生

Rail

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

糞ゲー人生

【Nコード】

N9261P

【作者名】

Rail

【あらすじ】

毎日怒涛のごとく襲いかかってくる致死性のもろもろをかわしきれずに日々死んでは『やり直し』をしている“俺”の話。

死にゲー

朝、目が覚める。枕元の時計は六時ジャスト。

部屋の中を確認。六畳の狭苦しいワンルームマンションには俺以外いない。昨日の夜にはなかったものが増えてもいない。オーケー。次にするのは窓の外の確認。

家の外に不審者はなし、ベランダには……黒い、鞆？

「やべっ」

咄嗟にそれを掴んで遠くに投げだそうとするが、それよりも先に鞆の内部でかちりと音がしたかと思うと俺の間近で爆発した。

俺は木端微塵となって死んだ。

『やり直し』だ。

一瞬視界が暗転して、ふと目が覚めたら蒲団の上だった。枕元の時計は六時ジャスト。

俺は素早く身を起こすとベランダに続く窓を開け、不審物を外に放り投げた。幸いここは三階建のアパートの二階で、窓の外は川が通っている。眼下では轟音とともに水柱が上がったが、人的被害はないだろう。

それが終わったらもう一度窓の外を確認。

狙撃者なし、突っ込んでくる飛行機なし、付近で事故や火事が起こっている様子なし。

外から中が見えないよう、レースのカーテンだけ残してカーテンを開ける。外は常を確認しておかないと、迫りくる災害が分からないからだ。

身支度を整えてから飯を食う。食い終わったら出掛ける準備。ド

アを開ける前は覗き穴から外をのぞき、ドアノブを握って呼吸を整える。

意を決してドアを開けると左右確認。すると廊下の端から勢いよくラジコンヘリがぶっ飛んできたのが見えた。急いでドアを閉める。

間一髪ラジコンカーを交わしてもう一度ドアから出る。アパートの階段を下りていると背後に人の気配がした。

あっと思った時にはすでに遅く、背後から激突して来た子供に吹っ飛ばされ、俺は頭から地面に落ちた。激痛と共に、頭が潰れる音がした。

『やり直し』だ。

世の中には死にゲーというものが存在する。

簡単に言えば異常に難易度が高いゲームのことで、基本的にキャラクターが死ぬことが前提のゲームバランスのゲームである。

初見殺しなんていうのもあって、初めてやった人間なら必ず引つかかって死ぬようになっていたりするのもざらだ。

プレイヤーがそのゲームをクリアするまで、もしくはプレイヤーがゲームを投げだすまで、彼らが操るキャラクターは何十回、何百回、下手すれば何千回と死ぬ羽目になる。

俺は彼らの人生に心底同情する。

しかしそれ以上に俺の人生を憐れまずにはいられない。

なぜかって？ んなもん簡単だ。

俺の人生が死にゲー状態だからに決まってる。

死ぬたびに起こる『やり直し』現象。

それにより俺は致命的な事態を回避するまで先に進めないのだ。

初見殺しは基本

朝、目が覚める。枕元の時計は六時ジャスト。

俺は布団から跳ね起きると、ベランダの不審物を眼下の川に投げ捨てた。それからさつさと飯を食うと、ドアスコップで外を確認してからドアを開ける。何故か俺が外に出るタイミングで突っ込んでくるラジコンヘリをかわす。

階段から降りるときは背後に注意して、俺に突っ込んでくる子供を避けた。ランドセルを背負った子供はそのまま階段を下りてどこかへ行ってしまった。

ワンルームばかりのマンションに、どうして小学生の子供がいるのかなんて突っ込みは今さらである。

ため息をついていたら空から落ちてきた謎の石が頭に直撃した。

『やり直し』。

目覚めからの一連の死亡フラグをへし折った俺は徒歩で大学へ向かう。大学に行くためのルートは三つ。安全率が高めのルートを選択する。

大学までには住宅街と繁華街、オフィス街を通り過ぎねばならない。

住宅街を歩いていると、前方から巨大な犬が突進して来た。咄嗟に近くにあった電柱によじ登り、誰かの家の塀の上に避難する。

大型犬はさすがに壁は登れないようだ、ほっとしたのもつかの間、右前方からカラスが飛んでくる。俺は光りものらしき光りものはつけていないが、野生動物は必ずと言っていいほど俺を襲うのだ。俺はバランスを崩さないようにカラスを鞆で追い払う。カラスは何度かアタックして来たが、一分としないうちにどこかへ行っ

まった。

その頃には大型犬の飼い主がやってきて、俺にペコペコ頭を下げつつ犬を連れて行った。

俺は再び地面に降り立って大学を目指す。

繁華街を歩いていると、昨日の夜から酔いつぶれているのであるう酔っ払いが地面に寝転がっていた。視線を合わせないように通り過ぎようとする、路地から出てきた男に捕まった。

「よう、兄ちゃん。倒れてる人間を見て見ぬふりするなんて薄情すぎやしないか？　ん？　まあちよつとこっちで話しようや」

そのまま路地裏に引きずり込まれる。選択肢は三つ。逃げる、戦う、要求に従う。

俺は逃げた。

「逃げるな！」

背後ででかい音がしたと思ったら、俺は頭を銃で撃ち抜かれて死んでしまった。

『やり直し』。

オフィス街を歩いていると、オットセイがいた。

「HELLO」

流暢な英語で話しかけられた。

俺は無視した。

直後に怒ったオットセイに殺され、俺は死んだ。

『やり直し』。

わけわかんねーよ畜生。

目指すはグッドエンディング

八回の『やり直し』を経て、俺は大学にたどりついた。
俺の在籍する学部棟に入ると、まず入り口近くにあるソファに座る。

ここがセーブポイントだ。

それから講義室に向かう。

講義中は比較的安心できる時間である。たまに不審者が乱入してきて刺し殺されたり電灯が落下してきたり、窓から入ってきた鳥が俺に特攻かけてきたりするがそれだけだ。基本的に安全と言える。

危険なのが昼休みである。

昼食を食べようと学食へ向かっていると、前方が妙に混んでいた。周囲の雑談から推察するに、宗教団体が大人数で来て演説を行っているらしい。

危険な予感がして全力ダッシュで逃げだしたが、

「ほら！ 邪なる異教徒が逃げようとしています！」

教祖らしき人物が叫び、信者らしき連中が俺を取り押さえられる。身をよじって逃げようとしたが、教信者の持つナイフが俺の首を切り裂いた。周囲から悲鳴が上がった。

畜生『やり直し』だ。

三回の『やり直し』を経て、俺は学食にたどりつく。

うどんをすすっていると、見知った人物が声をかけてきた。

「よ、元気か」

明るく笑う彼は油断しきった歩き方でこちらに近付いてきた。彼は俺のように鋭い目つきもしてなければ、気配を消した歩き方もしていない。羨ましいし妬ましい。

「一応生きてる」

「死んでることあるのか？」

「しょっちゅうだ」

俺が言っていると彼は笑った。冗談だと思っているのだろう。

「講義ノート見せてほしいんだけど」

「取ってない」

「なんでだよ」

「面倒くさいから」

死んだ回数×その日の講義数のノートを取るなんて正気の沙汰ではない。テスト前にコピーすれば十分だ。

「なんでお前はそれで成績がいいんだ……」

彼はうなだれていた。

「お前だって何回も同じ話聞いてたら覚えるだろ」

「講義は一回ぼつきりだ！」

彼の抗議を俺は流す。そんな人生が死ぬほど羨ましい。

彼と並んで学食を出ると、二階から落ちてきた植木鉢が降ってきた。ぼーっとしていた彼の頭に植木鉢は直撃し、頭をザクロよろしく破裂させた彼はその場に倒れた。即死なのは火を見るより明らかだった。

俺はその場から離れると校舎の四階に上がり、下のアスファルト

めがけて窓からスタイリッシュに身投げした。

『やり直し』だ。

三回やり直したら彼も自分も死なずに済んだ。やれやれである。

心折設計

一日は二十四時間だという人がいるが、本当だろうか。

毎日やり直しを繰り返している俺は、体感でいえば一日は百時間以上あるし、一年は十年以上ある気がする。

六回の『やり直し』の後、全講義を終えて俺は学部のソファに座る。これが第二のセーブポイント。

ここからが一番大変なのだ。

大学を出た俺はバイト先へと向かう。

俺のバイト先はコンビニ。強盗が多いのが玉にきずだが、オーナー夫婦も同僚もいい人ばかりである。

「おはようございます」

「あ、おはよう。今日は強盗を」

「呼びません」

四回目なのでオーナーが何を言うかを先読みして否定する。

「お前さんが来てから車が突っ込んでくるわ、強盗が来るわでうちもにぎやかになったな」

「車の方は加害者が金持ちだったから賠償金しかたまふんだくったじゃないですか。強盗も捕まえて表彰されたし」

「ある意味地域の名物になったしな」

オーナーは苦笑するが、俺を首にしないことは分かっているので気にしないようにしている。彼や奥さん、同僚が死んだ場合は必ず『やり直し』をしているので今のところ彼らに被害はない。

「道場は続いているの？」

「今のところ」

「筋肉ついてないけど」

「筋トレ、サボりがちなんで」

「意味ないな」

死んだら俺の記憶以外はすべてリセットされる。トレーニングした成果も、その五分後にトラックにはねられたら帳消しである。

どんなに努力した結果も、その後のセーブポイントまでに死んでしまえばすべてなかったことになる。

俺がトレーニングを嫌がる理由はそこにある。型を覚えるのはいいのだが、筋トレは何度やっても『やり直し』のせいで台無しになる。

本当なら授業もうんざりしているのだが、聞くだけなら比較的楽である。

それはさておき、仕事が始まる。ここから夜まで、いかに自分の心を折れないように保つかが課題となる。

Take 1

勤務開始から一時間後。

店の外のゴミ箱のゴミを捨てようとしていると、駐車場の車から出てきた客が火のついた煙草をゴミ袋の中に投げ入れた。

ゴミ袋の中には可燃性の何かが入っていたらしく、一気に燃え上がった炎が俺を焼いた。

『やり直し』

Take 2

客が放り投げた煙草を素手でキャッチすると、それを店頭に置いてあつた灰皿に突っ込んだ。
火消し用の水が可燃性の何かにすり替わっていたらしく、灰皿が爆発した。

爆風と金属片を浴びた俺は死んだ。

『やり直し』だ。

Take 3

少し早めに外に出ると、灰皿の水を交換した。
客が放り投げた煙草をキャッチすると、今度はちゃんと水が入っている灰皿の中にたばこを入れる。

ホッとしたのもつかの間、店内に戻るとレジにいるオーナーが強盗らしき男にナイフを突き付けられていた。

何で入口に店員がいるのが見えるはずなのに強盗するのか。

強盗がナイフを振りかざし俺に切りかかってきたので入口付近にあつた一本七百円のビニール傘で応戦する。

なんとかナイフを叩き落として強盗を抑え込むことに成功するが、車に残っていたらしい強盗の共犯がやってきてバットで頭をかち割られてしまった。

『やり直し』だ。

Take 4

何が辛いつても何度も同じ業務をしなければならぬのが辛い。エ

ンドレスサマーなんて可愛らしいものだ。エンドレス業務は笑えない。

強盗の顔は覚えていたので、店に入って来たところに声をかけてみた。

「ご存知ですか、お客様。当店は当地域で群を抜いて強盗遭遇率が高く、強盗逮捕率が高いコンビニなんですよ。ほら、あそこに表彰状が」

「うがああああ！」

逆上して意味不明な喚き声を挙げた強盗に絞殺された。

『やり直し』

馬鹿みたいに死んだ割に、俺は弱い。それこそカメやシイタケに触れただけで死んでしまう配管工並みだ。護身術を学んでもあまり身についていない。実戦経験は多いのに何故なのかは不思議である。そういう仕様なのかもしれない。

結局、十五回のやり直しを経て、謎の爆破テロを未然に防ぎ、強盗を阻止し、高校生の万引き犯とそのモンスターペアレントに勝利し、コンビニ前で生じた事故の被害者を車から救出して救急車に乗せることに成功し、勤務を終えることになった。

勤務時間は累計四十時間に達した。

労働局に訴えたいが、訴えたら俺が黄色い救急車に乗せられることになる。人生は不条理に満ちている。

バイト先からの帰り道、通り魔に襲われ飲酒運転の車に轢かれ、修羅場に巻き込まれて死亡した。

当然のごとく『やり直し』。

今日の勤務時間は六十時間に達した。

残機の数

朝、目が覚めたら地震と共に天井が落ちてきた。
跳ね起きて退避するも間に合わず、押しつぶされて死んだ。

『やり直し』。

目を開けると同時に弾けるように立ち上がり、部屋の隅へと避難する。目の前で大きな音を立てて天井が落ち、砕けた。

破片が俺に向かって飛んでくる。手でカバー。ざっくり切れた。
痛い。

手当てをしようと救急箱を探していると、ベランダの方で音がした。

カーテンを開けると、真っ白な装束を着た男と目があつた。
直後に男の腕がガラスを突き破り、俺の首を締めあげる。

「見られたからには消えてもらう」

不法侵入者はお前だろうが、という突っ込みは声になることはなく、見事に絞殺された。

『やり直し』。

寝起きは頭が回ってないから死亡フラグを回避するのが難しい。
五回やり直した末、天井を回避して白装束を無視して毒ガスの侵入を阻止して外出し、大家さんに事の次第を説明することができた。
天井が崩れたのは、老朽化に加えて上の階の人が暴れたかららしい。
物騒なアパートだ。

その後は四回死んでから大学へと到着する。
学部棟のセーブしてから講義室へと移動する。セーブというより

も中間ポイントという方が正しいかもしれない。しようと思ってセーブはできないから。

講義室で顔見知りが携帯ゲーム機で遊んでいるのを見つけて声をかける。

「何やってんの？」

「改造配管工兄弟」

「改造？」

俺が首を傾げると、彼は分かりやすく説明した。

要するに、自分が買ったゲーム機を一旦パソコンに入れ、ゲームの内容を書き換えるものなのだという。

「難易度は？」

「鬼畜」

「……楽しいのか？」

「太鼓ゲームにだって鬼モードがあるんだぞ」

知るかよ、と思いつつ彼がゲームをプレイする様子を見る。

なるほど、鬼畜というだけあって難易度が半端じゃない。

ステージは一見普通に見えて、敵が異様に多かったり逃げ道が少なかったり細かい技術が要ったりで、並みの腕では死んでしまうようなものだった。

プレイヤーの彼は下手くそなようで、髭の生えた配管工はあつという間に死んでいく。

そしてふと、あることに気付いた。

「なあ、これ何で残機が減らないんだ？」

先ほどからキャラクターは何回も死んでいるというのに、「画面の上に表示されたキャラクターの残機は九十九のままだ。」

「あ、これ改造だから」

こともなげに彼は言う。

「いくら死んでも大丈夫なようになってんのさ。死にゲーだからな」

その言葉にとてつもなく嫌な気分になった。

俺は物心がついてからずっと死につばなしだ。もう何回『やり直し』てきたか覚えられないほどに。どれだけ少なくて見積もったとしても四桁は死んだ。五桁か、下手すりゃ六桁か。

もしかしたら俺の残機もこの改造ゲームのように無限大なのかも知れない。

「残機がなくならないんじゃないかゲームオーバーにならないじゃないか」
「大丈夫、全部のステージをクリアすりゃゲームオーバーさ」
つまりそれまで終わらないということか。

俺はさりげなく彼に聞く。

「人間の人生はいつクリアできると思う？」

「天寿を全うしたときだろ」

ゲームをやりながらの会話なので、彼は上の空だ。本音が駄々漏れとも考えられる。

俺はよろける足で彼から離れた。

日本人の平均寿命は八十歳。俺は現在二十歳。つまりは太陽暦であと六十年も生きなければならない。

「あーもう、止めた！」

ゲームに詰まったのだろう彼が頭をかきむしってゲーム機の電源を落とした。

俺の人生の電源は誰が切るのか。

うなだれる俺の頭にねじが緩んで落ちてきたスピーカーが直撃した。

『やり直し』だ。

人カTASは無理

そのことを知った時の衝撃は計り知れない。

「人生は一度こつきり。やり直しなんて出来ないのよ」

小学校の先生の言葉に俺は顔をしかめて言った。

「死んだらやり直しになるじゃない」

その後先生から命の大事さについて、こんこんと諭された。死んだらリセットされるなんて甘い考えは捨てなさい、と。

では死ぬたびに巻き戻される俺は一体なんなのか。

先生に必死で説明したが、彼女は俺の言葉を一向に信じてくれなかった。クラスメイトも同様。

直後に襲ってきた地震のせいで倒れた本棚に押しつぶされて死んだため、その日の朝のSHRから『やり直し』になったのだが。薄々気づいてはいたのだ。

何回『やり直し』になっても同じ授業の内容を喋る教師。同じ内容の事を話しかけてくるクラスメイト。先読みした言動をすれば気味悪がられた。

だけれども、こんな辛い目に遭っているのは自分ばかりではないという思いが心の支えだったのだ。

けれども彼女らの言葉により、どうやら普通の人間は毎日デッドORアライブな生活など送らないし、滅多なことでは死なないし、死んでも『やり直し』にならないらしいと知った。

何故か俺の命を狙う災害は一発食らえば即終了というものが多い。

要するに即死だ。

病気や食中毒、微妙なレベルの怪我などはない。幸か不幸か。

パソコン室へ行くと、顔見知りを見つけた。彼は何やら動画を見ているようだった。

「なんだ、AVじゃないのか」

「大学で見る奴がいるかつ！」

彼は顔を赤くして否定する。俺たちのやり取りが聞こえたのか、周囲の女子学生から冷たい目で見られた。それに気付いた彼がまず顔を赤くして俺を睨みつけてくる。

俺は彼の肩を優しく叩いた。分かっているって。

しかしこれ以上やりすぎると彼に殺されるかもしれないので話題を移す。

「なんだ、ゲームの動画か」

「ああ、昨日の改造ゲームのプレイ動画」

「死にゆく配管工か」

俺が目いっぱい同情をこめて呟くと、彼はにやりと笑って画面を指差す。

「見てろ」

言われたとおりに画面を注視する。

クリアできるのかどうか怪しい複雑怪奇なステージだった。

触れたら死ぬような障害物が多いし、不規則な動きをする敵がうじゃうじゃいる。

けれども誰かが操るキャラクターは難なくクリアしていく。一度も死ぬことなく。

「これは誰がやってるんだ？ 神様か？」
「いや、TASさん」

この日から俺は顔も知らないTASさんを心の師匠と呼ぶことにした。

俺も彼のように降りかかる苦難を軽やかにクリアしたいと思って。

TASというのがTool-Assisted Speedrunの略で、つまりはエミュレーターの機能を使って通常の人間では出来ないようなスーパープレイをしている動画を総じてそう呼ぶのだと知るのはかなり後のことである。

スキップ不可は一長一短

不便で辛いばかりの『やり直し』だが、いい点がある。
テストの時だ。

「なあ、今日のテスト、何が出ると思う?」

「情報料は学食のA定食だぞ」

「買った」

俺はテストのヤマが当たると公言している。二回目以降は知っているからだ。

勉強する時間があるかは別として。

俺の場合、日々の授業を受けすぎたせいでそれがなくともテストはある程度できるのだが。

誰かが言っていたが、一遍に詰め込むよりはたくさんの回数聞いた方が覚えやすいらしい。

昼休み、同じサークルの女に呼び出される。

「あ、あのね……!」

「ごめん、俺好きな人いるんだ」

彼女の愛の告白をすっぱりさっぱり断った。皆まで言う必要はない。一回目に聞いたから。

断った真の理由、君が好みじゃないからですとは言わない。

言ったら殺されるのだ。言葉のあやでなく。

「じゃ、じゃあせめて……!」

「ごめん、キスとかそういうのは付き合っていない人とはしない主義なんだ」

ここでキスをさせたら無理心中に巻き込まれるのだ。

「で、でも……」

「俺のことは忘れて、他の人を好きになった方がいいよ」

想っただけならいいと答えると、彼女のことを好きな男が背後から現れて俺のことを殴り殺すのである。

「それじゃ」

俺は短く言ってその場を離れた。

女は嫌いだ。死亡フラグの宝庫だから。

学食で食事をしていると、知り合いが声をかけてきた。

「おい、見たぞ。なんであんな可愛い子、振ったんだよ」

「好きな人がいるからだ」

「だからって、あんな表情一つ変えずに断るなんてお前男じゃねえよ」

「知るか」

俺は黙々とカレーを食べる。

一回目にはときめいた。だが直後の豹変っぷりを知ればそんな気持ちは霧散する。

二度三度と鬼の形相の彼女に殺されたので、かわいらしい表情が嘘ではないかと思えてしまう。マイナススタートだと好印象に持ち込みやすいと言うが、そこまで突き抜けたマイナススタートはご免こうむる。

それに、

「お前はゲームのイベントシーンを何回見ても同じように感動できるのか？」

「は？ リアルとゲーム一緒にすんなよ。過ぎ去った時間は巻き戻しできねーんだぞ現実。現実見ろよ」

見た結果がこれだよ。

俺はむかつ腹が立ったので彼のトレイにあるプリンに自分のカレ
ーを投入した。すると逆上した彼にぶん殴られ、机の角に頭を強打
して死んだ。

『やり直し』。

ちょっと怒ったからって相手を殺そうとするのはどうかと思う。

求む、攻略本

自分がゲームの主人公じゃないかと考えるとぞっとする。
もしそうならば、誰かが俺をどこからか操作しているというこ
とだ。

俺の意志だと思っていることも、実はすべて何者かの手によって
そう思わされているだけかもしれない。

だとしたら、俺は何のために生きているのか。

誰かの暇つぶしのためなのか。

それが俺の生きる意味なのか……？

そんな哲学的かつ自虐的、その上推論ばかりの事を考えてはいら
れない。俺にはするべきことが山ほどあるのだ。

爆弾の解除、不審者の通報、危険物の排除。

油断すると死ぬかもしれない運動を常に続ける必要がある。俺が
生きている限りはずっと。

そう言えば古いソフトの話を知っているだろうか。

某有名人の名前が入っているファミコンソフト、そのソフトには
宝の地図なるものが出る。

その地図は当初何も書かれていない白い紙だ。

そのままじゃ宝の地図は浮かび上がって来ない。どうすればいい

のか。

何もしないで一時間日光に当てておくのだ。

ゲーム内の時間ではない。リアルの時間で一時間、何もせずに放置しておくのだ。

当時の子供たちが分かったのかどうか気になるところだ。

しかしもしかしたら俺の人生も、そんな風なのかもしれない。

俺には考えの及ばないような意外な手段で、この不毛でシニールな死にゲーも違った展開を見せるんじゃないだろうか。

「俺の人生の攻略本はないもんかねえ」

学食で飯を食いながら呟くと、正面に座っていた顔見知りが一冊の本を差し出してきた。

その表紙には『脱ニート！ ひきこもりからでも就職できる！』というタイトルが書かれていた。

「おい、大学生はニートじゃねえぞ。バイトもしてるし」

「じゃあこつち」

次に差し出された本は『勝ち組！ 公務員に俺はなる！』といういかにも頭の悪そうなタイトルだった。

「就職って中間地点じゃね？」

「じゃあこれ」

次に差し出されたのはパンフレットのようで『快適な終の家』という各種別荘のパンフレットだった。

「人生全体はないのか。っていうかお前は一体どういう本を持ってるんだ」

俺の問いに彼は口をすぼめ、もう一冊さらにこちらに渡してきた。タイトルは『ゆりかごから墓場まで 完璧人生プラン』。

これはいいと思ってパラパラと流し読みしてみるが、いかに勝ち

組になるか、情報を有効活用するか、積極的に活動するかという理想論が書かれただけの本だった。狂人の凶刃から逃げる方法や降つてわいた天災からの逃げ方などは一つとして書かれていない。

「屁のつつぱりにもなりやしねえ」

「ざけんな」

今回は殴り殺されないようにと彼から距離を取ろうとしたら、背後を通っていた学生にぶつかってしまった。

すると彼女が持っていたトレイが衝撃でひっくり返ってしまい、彼女の食べるはずだった熱々のうどんが前方に吹っ飛んでいった。それをひつかぶったアメフト部員が持っていた悲鳴を上げて持っていたダンベルを放り投げた。

俺はそれを間一髪首をすくめてかわしたが、俺を越えていったダンベルは隣のテーブルのトレイに落下し、シーソーよろしくそこに乗っていた陶器のどんぶり三つを跳ねあげた。飛来する刺客は俺が避ける暇を与えず、俺の頭にクリティカルヒットした。

ピタゴラスイッチかよ。

『やり直し』だ。

……よしんば攻略本があったとしても、ノーミスは無理だろうとつくづく感じた。

強くなるために

思うに、俺の人生は常に受動的だった気がする。

先に死亡フラグがあり、それを俺がかわしていく。フラグという
か死亡原因と言った方が正しいかもしれない。

いっそ能動的に、こちらから仕掛けてみるのはどうだろう。

昨日テレビでやっていたプロジェクトなんかを思い出してみる。
彼らは自分から仕掛けていって今の成功があるのだと言っていた。
ならば俺もそうであるのかもしれない。

しかし死因に対してどう挑めばよいものか。

「というわけで、俺は修行の旅に出ることにしました」

「……頭は大丈夫かね？」

朝一で来て上記のことを口にした俺を、ゼミの担当教授は胡乱な
目で見た。

「頭は大丈夫ですが、命は危険です。ですから旅に出ます」

「出てもいいが、休学届は出したまえよ。あとゼミはクビだから。
あとこれは餞別だ」

教授は俺に黒飴を一袋くれた。開封済みだった。

俺は教授の研究室を出たその足で旅に出た。

行き先は決まっていない。交通手段は滅多に使わなかった我が愛
車、真っ赤なボディがかっこいいブルーハーツ号（自転車）だ。

「無限の彼方へ、さあ行くぞ！」

勢いつけて走り出した俺だったが、交差点に差し掛かった時、ブルーハーツ号のブレーキが壊れていることが判明した。どうやら随分と運転していなかったせいで整備不良になっていたらしい。咄嗟にハンドルを切るが間に合わず、俺は交差点に突っ込んでトラックにはねられてしまった。

『やり直し』。

きつと当て所のない旅をしようとしたのが間違いだったのだろう。まずは計画を立てるべきだった。俺は日本地図とにらめっこをした。

強くなるにはどうすればよいのか。何にも負けない強さ、誰にも負けない（死なない）強さを手に入れるには。

誰にも負けない、最強、つまり日本一。

「そうだ、富士山へ行こう」

そうと決まれば善は急げ。俺は再び教授に暇を告げるとブルーハーツ号にまたがって富士山へと向かった。

ブルーハーツ号のブレーキが壊れていることを思い出したのはダンプカーに撥ねられてからだった。

『やり直し』。

十数回の『やり直し』を経て、俺は富士山の麓に辿り着いた。
でつかいどー富士山道ふじさんどーなんちゃって。
とりあえず山に登ってみようと山道を歩き出す。

山道を登っていると、上から巨大な岩が転がってきた。インディ
ジョーンズかよ。
咄嗟に横に跳躍して避けるが、岩は俺の後ろにあった木に激突し
て方向を変え、俺の方へと突っ込んできた。

俺は岩に潰されて死んだ。

『やり直し』だ。

気がつくと大学のソファにいた。富士山にはセーブポイントがな
かったらしい。つまりもう一度富士山に行くためにはまたそろ十数
回の『やり直し』をしなければならぬということだ。

「……修行つて、もっと身近なところするべきだよな」

俺はうなずいて様々な学生がサークル活動をしている学生会館に
向かった。

週に一度町の道場に通ってはいるが、学校の部活ならば毎日出来
ると考えたからだ。決して富士山に行くのが面倒くさくなったわけ
ではない。心が折れたわけでは決してない。

ともかくその結果、柔道部と空手部と合気道部と弓道部と剣道部で『やり直し』になるはめになった。

心を落ち着かせようと向かった茶道部で炉に頭をぶつけて死んだ辺りで諦めた。

俺、修行するって柄じゃないや。

伏線なしの超展開

何もかもうまくいかない日っていうのは時折訪れるもんだ。

英語で言うなら「A bad hair day」。言う必要ないけど。

まさに俺はそんな感じだった。

朝から失敗し続けて、半日少して百回以上死んでしまった。

学食で食事していると、ふと周囲の喧騒が消えた。

すわ死亡フラグかと顔を上げた俺の目の前に、そいつはいた。

「こんにちは」

お父さん、お母さん、エリザベス・コンロイ（実家の犬）、大変です。俺の目の前に白い翼を背負った天使が現れました。

「君って大変な人生だねえ」

クスクスと笑う彼、もしくは彼女は俺をじっと見ながら言った。

不思議なことに周囲の人間は一時停止ボタンを押したかのように誰も彼も動かない。

天使は中性的な美貌の持ち主だった。髪は男なら少し長めと思えるし女なら短めだと思う。ちよつとばかり癖の強い金髪だ。

白いローブのようなものを着ており、ゆるめのそれからのぞく体のラインは二次性徴を迎える前っぽい感じだ。やっぱり性別不詳。

声で判断するのも難しい。変声期前ならこれぐらいの男はいるし、これぐらい低い声の女もいる。

天使は性別がないと聞くし、判断できないのは当然かもしれない。

「ねえ、僕の声聞こえてるよね？」

僕っ子？ 男？ 個人的には前者希望だが。

「惰性で生きすぎたせいで、まともな思考能力なくなっちゃったのかな？」

そう言つて天使はため息をつく、と、ばさりと音を立ててその背中に生えた羽を動かした。一足飛びに俺の眼前へとやってきた。そして天使はまじまじと俺を観察する。

「不幸そうな顔してるね。目つきも悪いし、顔色も悪いし。そりや何万回も死ねばこんな風にもなるよね。ご愁傷さま」

そこまで言われたら俺だつてカチンとくる。

「あんた誰だ。俺に何の用だ？」

今まで異常事態に遭い過ぎたせいで、特異な出来事に対する耐性ができていた。

俺が天使を睨みつけて言えば、天使は可笑しそうに笑った。

「ごあいさつだね。僕は天使だよ。見て分らない？」

「そんな口が悪い天使がいてたまるか。羽をつけたトンチキにしか見えねえよ」

「そ。別にいいけどね」

自称天使はにやにやとした顔で俺を見ている。人の神経を逆なでするのが上手い奴だ。

「で、その天使様が一体全体どういう理由で俺の前に現れたんだ？」
「いやー、上役がうるさくってさあ」

天使は大袈裟に首を横に振ると、両手を上に向けて見せた。

「悲しむ人が少ない世界にしろって業務目標掲げるからさ？ 誰かに降りかかる災厄を一人に集めてみたんだよね。死んでもある程度戻ってやり直せるようにしてさ。不幸な人減って万々歳でしょ？
なのにあのお堅い上役ときたら、

『不幸というものは誰かに押し付けるものではない！』とかって怒るんだよね」

話が終わる前から俺の口の端は引きつっていた。鏡がないから分からないが、多分青筋も立っているだろう。

ここまで言われて天使の言う「一人」が誰か分からないわけがない。

「で、今までの謝罪してこーいつて雷落としてくるからさ、こうしてわざわざ汚い下界まで足を運んできてやったわけ。どう？ 嬉しい？」

「嬉しいわけあるかボケ！」

俺は諸悪の根源に殴りかかった。

しかし天使はひらりとそれをかわし、食堂の天井近くまで浮き上がる。

「あつはは、だからごめんって言ってるじゃん」

「一度も言ってねえよ！」

俺は手もとの食器を奴に向かってぶん投げた。しかしそれは不可視の壁によつて当たる直前に跳ね返される。

「これでもちよつとは悪いって思ってたんだよ？ 君の死んだ回数知ってる？ 十五万飛んで七百六十三回！ ちよつとしたもんだよね」

「それが悪いと思ってる態度かよ！ 土下座して謝れ！ 鉄板焼き土下座だぞ！ 背中には焼いた石載せろよ！」

なおも憎き相手にダメージを与えようとする俺だったが、不可思議な力に守られている奴には傷一つ付けられそうになかった。

「まあまあ、落ち着きなつて」

天使はそこで初めてにつこりと笑った。

もしも先ほどの態度を知らなければ、こいつのことを慈悲深い天使と信じてしまいそうになるくらいの神々しさだった。

「僕は今日、君に今までの償いをしに来たんだ」

そうして奴は、ある選択肢を俺につきつけてきたのだった。

唐突な仮エンディング

天使が提示した選択肢は二つ。

「一つは今の人生を強制終了して、新しい人生を送ること。今までこっちの過失で君が損してきたわけだからね。お詫びも兼ねてたくさんさんの幸福に恵まれた人生を用意してあげる」

そう言っ天使はにっこりと笑う。
過失っつーか故意だろ。

「ってか、その場合俺の今までの記憶はどうなるんだ？ 消えちゃうのか？」

「いいや。それじゃ償いにならないよ。今までの不幸を知っているからこそこれからの幸福が一層輝くわけだからね。良いスパイスになるでしょう？」

「スパイス手に入れるためだけに二十年も苦しみたくなかったよ」

俺が思わず嫌味を言っ、天使はまたぞろ俺のことを笑いやがった。

「中世の人間たちはスパイスを求めて海へと飛び出していったよ」

「俺は現代の人間だ」

「頭かったーい」

「お前絶対俺に対して悪いとか思ってねえだろ！」

怒りと諸々の感情で顔面が引きつる。

が、天使はそんなことを一切関知してないかのような表情だ。

「閑話休題、もう一つは今の人生のままを生きて、これから幸福に満ちた人生を送る。この場合、君の難関苦難に満ちた今までの人生は消えないまま。さ、どうする？」

そう言つて天使は俺の目の前で楽しそうに笑つた。

どちらにしろ魅力的な選択肢だ。

陰鬱だった今までの人生を捨てて新しい人生というのも魅力的だし、これから幸せになつて今まで俺の行動を馬鹿にしてきた連中を見返してやるのも楽しそうだ。

だがしかし、今までの人生経験から言つてこういう時に提示された条件というの必ずと言つていいほど致命的なまでの欠点を隠されていた。

迂闊に選べば死んでしまう様な。

俺は深く息をつくとき、しっかりと天使を見据えた。

「いくつか聞きたいことがある」

「いいよ」

天使は挑発的に微笑む。

実はこいつは悪魔じゃなかつたかと内心で疑つた。そっちの方がよっぽどしつくりくる。

「一つ目の生まれ変わりを選んだ場合、俺の今持つてる記憶はなくならないうて言つたな。じゃあ人生のやり直したのは何歳からだ？」

俺の問いに天使は肩をすくめた。

「あんまり年齢がいつちやうとその人格が発生して面倒なことになつちやうからね。大体一歳くらいかな」

「……俺の記憶は持ったまま？」

「そう、持ったまま」

二十歳過ぎてんのに今から赤ちゃんプレイとかどんだけハイレベルな要求だよ。

「あー……二つ目の選択肢の方、幸福に満ちた人生ってのはどういうのだ？」

「そりゃあもちろん」

天使はにやりと笑った。

「富、女、地位、名声、友人、才能、すべてに恵まれるってことさ」「そりゃ結構なことだな」

しかしどうにも胡散臭い。

俺は鼻で笑った。

「その幸運はどこからやってくるんだ？俺の不幸は他人の分を引つ被ったせいだってんなら、お前の言う幸福は誰からか持ってきたものじゃないのか？」

俺がそう言うと、天使は目を丸くした。

「まさか。君のためだけに作った幸福に決まってるだろ」

俺が腑に落ちないのを察してか、天使は続けた。

「幸福も不幸も作れるさ。でも不幸を作ったところで誰が得をするの？　せいぜい他人の不幸は蜜の味って声高に言って笑う野次馬が楽しむぐらいなもんだろ。そんなんじゃうちの上役の理想には全然近付かない」

「不幸を消せばいいだろうが」

天使は心底馬鹿にしたように笑った。

「無理言わないでよ。人間が人間である限り不幸がなくなるわけないだろ。綺麗なのも汚いのも全部ひっくるめて人間なんだから」

随分と達観した天使だ。むしろ諦観か？

「どうやったって不幸は生まれる。幸福は作れるけど、作りすぎたら副産物^{不幸}も出てくる。ま、君の場合は今までが今までだからお詫びも兼ねていい幸福を作ってあげるよ」

天使の言い分に物申したいこともあるが、これ以上の言い争いは不毛な気がした。

俺は腹をくくった。

「なら俺は二つ目の選択肢を選ぶ」

俺が不幸になったのはこの世界でのことだ。ならば幸福になるのもこの世界であるべきだと思う。

「本当にそれでいいの？」

「ああ」

うなずいてみせると、天使は顔をほころばせた。

「よかった。なら君は幸福な人生を送ることになるよ」

天使がそう言うのと、その体が薄らぎ始めた。多分帰るのだろう。

俺は何とも言えない充足感に満ちていた。

今までの苦労が一気に報われたような気持ちだ。

糞ゲーのような支離滅裂で難易度が馬鹿みたいに高く面白くない人生とは今日でおさらばできる。これ以上の幸福があるだろうか？

あばよ、死亡フラグ。次に会うときは俺が天寿を全うする時だ。

ふと、感慨無量の面持ちの俺と天使の視線が合った。

天使はにっこり笑った。

「君は幸せになる。 三年後から」

「……………おい、ちょっと待てどっいうことだ!？」

消え行きそうになる天使の体に手を伸ばす。天使の体はすでにほとんど見えなくなっており、俺の手は空を切った。

天使の声が聞こえる。

「いやー、実は他の人の不幸を君にかぶせすぎちゃってさ、なんていうのか予約不幸？ 三年後までびっちり君の人生に不幸が降りかかるようにセッティング済みなんだよね」

「ふっざけんな！ すぐに解除しやがれ！」

「あつはは、無理無理。だから生まれ変わりの選択肢まで用意してあげたのに」

「説明しなかつただろうが！」

「ごめんね、三年後までは死んでも時間が戻るようにしといてあげるから頑張ってね！」

軽すぎる応援を最後に、天使の気配が完全に消えた。

同時に今まで動きを止めていた周囲の世界が一斉に動き出した。

こんなのかなよ……………？

呆然としていた俺は周囲の悲鳴に気付かず、食堂に乱入して来た巨大な犬に喉笛を食い破られてしまった。

『やり直し』だ。

天使はあと三年俺には不幸が続くと言った。

しかしこれは逆にいえば、三年後に幸福な人生が控えているということだ。

その日から俺は三年後の幸福を思い、日夜サバイバルな人生のクリアを目指すようになったのだった。

俺の糞ゲーのような人生のエンディングまでは後三年。

唐突な仮エンディング（後書き）

ここまで読んで下さった方、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9261p/>

糞ゲー人生

2011年4月30日02時15分発行